西遊旅譚
巻之貳

西遊旅譚巻之二

八月七日鳥羽(トバ)を發(ハツ)して舟にて島々の中を渡(ワタル)風景(フウケイ)佳(カ)なり飛島を右になして左に朝熊(アサマ)山を望む走る事二里二見(フタミ)の岩を左の方に見て又ゆく事一里にして三軒家(サンゲンヤ)といふ所に舟を着(ツク)此所酒食アリ五六町程行川崎といふ所一里則宮河なり此山田川崎乃浦しの渡り茅屋(カヤヤ)なし好み家瓦屋(カハラ)なり

八月九日江州土山の驛(エキ)をたてより右に入山中小川を越る事二瀬又ゆきて大河二瀬を渡(ワタリ)山中より入山の頂(クヘ)をゆき加井掛(カサカケ)

ここら邊人家ちりぢりなれよりハ平地にして田畑のはるばると行(ユキ)

日野に至りに數百ばかり備る人家二千餘軒四面山めぐりて

海をも見ず加藤侯の領地なり

八月十二日日野より一里斗山路よ入小野村なる墓(ハカタ)の山に

林にして田夫(デンフ/ヒャクセウ)の茅舎(ボウシヤ/カヤヤ)をとひ申

行厨(ベンタウ)をひらきけれバ童子二三輩(ハイ)

めづらしげに来る餅糯(クハシ)など與(アタヘ)しに

出しかバ二歳(サイ)の児(コ)ハ不辭(アヒシテズ)して

傍(カタハラ)まで来たり五六歳(サイ)の童(ワラベ)ハ畏(オソレ)て

山田の町家作り

小野村山中の小童
皂角子(サイカチ)の木多し
土俗曰
むかし人魚
の血落たる
所より生ずる
なりと云
人魚墳
八方より
文字
あれども
みえず
土民の曰救世(グゼ)菩薩乃
墳と云小童石をなげ
うてば鐘の声をいだすと
二尺
一尺寸余

方の平地にして石乃大塔ありめぐりにも石塔多し

日野より二里乾の方石塔寺の大塔の圖
大石をもつて作る古老の曰天竺にて釋尊
入滅一百年の後月氏國阿育王八万四千の
寳塔を作り十方世界へ投られし一塔
こゝに飛来するといふ
然れは千年を經
ものなるべし
總高サ二丈五尺余
文字なし
此塔昔ハ崩れてありしを石塔寺を
創立して此塔をも見つけたりと云
此石もと山中人跡絶たる所に一塔あり
遠くよりはなはだ見ゆ
一枚石
一枚石
五尺二寸

石塔寺の圖
大塔
此辺の石塔嘉元二年ト彫付てあり
石塔寺本堂是也
石階石塔ヲ以畳

日野ハ加藤侯の領地にして此石塔寺ハ仙臺侯八千石の領地之

夫より一里ほど山に入月を戴て草中鈴虫すゞし

山〳〵をまはし見渡し物更に日野へ帰る

日野町より川連綿向の社より甚つ境内神輿庫乃南なれ

封疆の裏に墳あり如圖

延慶ハ人皇九十四代花園

院乃年号也寛政二年

庚戌迄五百年ニ當

碑銘圏點あるハ字缺者也

マヽ二字在トモ不見

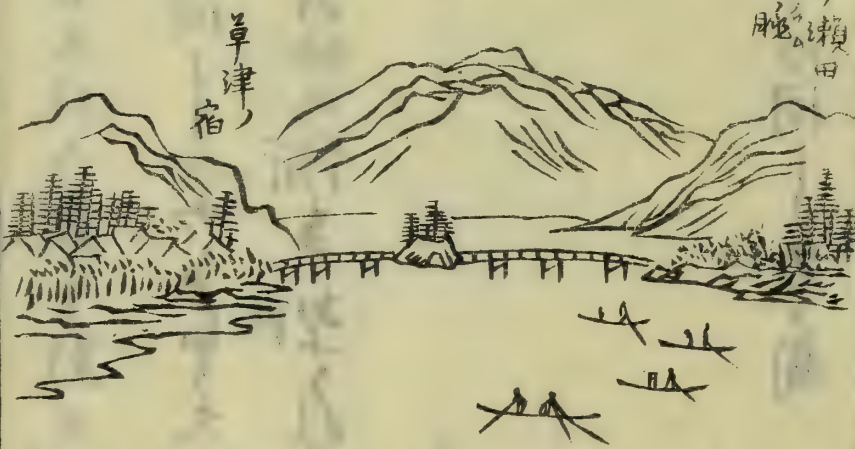
二親幽靈無法界

釆五成佛得道也

方率都婆立°者爲

延慶三年十月十六日

願主°日記重°方

八月十五日石山寺に宿る月徹照て山湖水を繞勢田の橋見るべく佳景也

ウゴイト云魚ハスト云魚
鮯皆湖中ノ産ナリ

十七日大坂に至りて数日滞(トヾマル)る高(コウ)津(ヅ)の祠より西北を望む大坂ハ丸に見る此地の繁(ハンセ)華繁(シゲ)けれハ記を略す

高津の祠より見る図

高閣ハ西東乃本願寺也

芝居川筋
木津川

天王寺石乃鳥居唐銅の額あり
小野道風の筆蹟といふ五重の塔
其外諸堂多し
清水観音ハ高き所也眺ハ堺筋見え
此畑也浮瀬なとゝいふ遊亭あり

大坂より船にて渡り兵庫を十里摩耶山下を走て則兵庫に至る市街富商多し清盛の築嶋楠正成の塚あり和田の岬行平乃松有り晦日須磨寺を過て敦盛の石塔を見る

播州舞子濱

須磨寺
往来より二三町入

仲哀天皇の陵路傍にあり是より垂水山の上千壺と云所に陵の跡あり舞子が濱松優て道中第一の佳景也是より明石に至る人丸の祠の門に入石碑を建寛文四年甲辰明石城主日向守源信之これを誌

九月朔加子川と云驛より左方に入尾上の鐘高砂の松を
昔乃松ハ枯て若松を植り尾上乃鐘支那物とみへり
模様ハ天人樂器を鋳り
住吉の祠又山畑を越て石乃寶殿あり此も大石皆山をなし
則御影石也切出せし
曽根の松ハ天満の祠乃境
内なる祠大社にして老松
實に千歳を經る大樹也
夫より豆嵜の驛に出る

尾上の鐘乃圖

石の寶殿
石
石
山皆石
石
曽根の松
甚乃大松にして
龍蛇のわだかまる
ごとし
一方ハ枯たり

市の川乃前より姫路乃天守見ゆ
ることゝし下れ手にも亦市の川あり
川ハ二里片島の驛より赤穂ヘ三里
山に入（赤穂ハ往来にはなれ南海に近し）数日城下に留る
城内大石内蔵の屋鋪門より二巴乃瓦を
五日新塩浜といふ所を見物して三
岬の明神といへる社古大松海岸海山
を繞波濤渺々として島山ハ連て風景佳
一里海邊より舟出し渡る事三里坂越

といへる船つき市中人家多し。八日赤穂を発す市街

坂越

生島

大慈閣

を出て山路に入り行三里ばかり山林に
して路狭く且は松茸多し是より八木
山越といふ片上に出る即往還是よりは
備前の地にして伊部村焼物あり備前焼是なり
かくと云る右の方に入事半里両山
屹て高し山径石を登りて穴に上る
草木を生じ穴庫なし此ものの下に
に樵者に是を問ば堀とりしものとし

何の時作りし物とも知れず此山の彼方に二間三間又ハ五六間
方なる塚大石を以て畳て作る所多し総て備前備中
の國内古墳陵の類多し然とも往古の事にして傳説なし
此奥十餘町に寺あり観音を安置す飛泉を見る大路より
外なり夫より四里にして岡山に至る城下市街續て富人多
京橋より一二町を隔て二ツ架る所ありて飛石ある
十一日岡山を發て此より二里ばかり備中の境なり又吉備
ハ一社にて吉備津の祠に釜あり初穂銀を納れバ火を焼
其釜忽鳴動する奇也僅なる釜の方なれバ一寸奇事なし

祠も後世建るよし茲ゟ筋ゟの二里右乃方ニ入足守也木下
侯二万五千石の領地にして陣屋ハ黒宮氏の邸中にあり飛石ハ古礎を以
てあり径二尺余是ハ備中足守賀陽郡溝手村賀陽寺乃古
跡より堀出せし千年を経しもの也又径尺五六寸余生焼の壺あり
同賀陽郡巌山下より堀出せし外ニ鬼面瓦とも見ゆる肉高にして帯

色ハ
ウス墨
灰色ナリ

に見ざる地也 領内柏井と云所
足守より一里田畑中丈四方雪の
不積所在り黒宮氏発起して
湯治場となせり浴する者多し

於きて五六町ばかりにて中山の奥にある所岩石数十丈
落て飛泉あり又鬼城といへる所石を以て堞の如く作る
鬼の釜口径八九尺あり因幡の方へ十余里鐘乳穴あり
穴中甚廣く鐘乳石多し
備中下道郡南山より西に古墳あり河邊の驛より十二
三町南に入墳の高さ七間半許登て上ハ廣さ径六間中
壇廣サ一間半に周二百四十歩許溝ありて深サ六七尺埋れて淺
封疆の高さ六尺形ハ櫝周四百歩余所々壺を置たるの
數千もありしが今ハ二十許残りしとなり

壺乃口径八寸高サ一尺二寸如圖半に帯あり素焼にして赤色なり

備中下道郡二万里塚の圖

塚の其の後左右昔ハ池塘となりて今ハ田となる
大墳高八間小墳高七間小墳大墳に傍て
穴あり共崩て穴の口廣さ六尺二三十年以前
までハ人這入しと云傳ふ中に穴の内平らにして
凡十四五歩ありハ石門ありて石の
扉ありて是よりハ底の方に
空ありて入りしとかや上古の
王侯の墳なり

同山手村古墳あり十五六間許(ハカリ)山を登(ノボリ)て穴あり二間深く内て入て八間を四方天井(テンゼウ)石一枚なり左右も一枚石也穴中高さ七八尺

是より國分寺へ五町許なり

九月十四日足守を発して長田村といふ窪木村より宗坐といふ
所人家つゞきて富商もあり夫より中原川を渡て岡田より
至伊東侯の陣屋を拝して矢掛に至る往還より板倉侯
領地人家続く此間吉備公の墳あり夫より神辺今津此
間福山の城見ゆる阿部侯十万石の領地なり尾の道
といふは市街縦横にして富商多し西の小江戸といふよし
藝州侯の領地也此所より船に乗舟を出して東風にて走
事十六九里夜に入小島につきて泊る夜半東風吹て船を
出して明方小島に至る船中より西南の方を眺月海波

を照し島々点々として如なり艫の方に立て其景を
うつさん此趣は紅毛油画法をもてせねば写しがたし扨此所広島
川に入て猫屋橋に着く広島ハ芸州侯の城下市街縦横あり
則ち左方より見る右の方に入魚市場あり繁昌なる躰也夫より町を出
離て海辺に出小島数々ありて佳景なり夫より一里半草津といふ所へ
至る猪の口といふ所より漁舟に乗宮島へ渡海上三里宮島亘七里田
畑なし樹を伐ず海岸に人家を作千余軒あり市中鹿を放又
猿多し宮居ハ平相国清盛の創立也珍らしき事いはんかたなし
此日九月十七日大潮満て廻廊の燈火水面に映ず

藝州嚴島宮之圖
彌山岳といふ
山上に堂宮多し
未踏なれて
登る事を禁ず

左の方千畳敷といふ堂あり堂ひろく空堂にして様相なし

宮島を出船し小方
是より二里関戸乃駅　右の方一里入防
州岩国あり
岩国錦帯橋
乃図
此山を
城山と云

橋百二十間余
中の橋三ツハ
樋ろし

九月廿日防州岩國にいたる此所山中にして海を三里を隔り
此地方ハ石見の國より岩國城下錦川流て橋五ッ架たり
甚奇なり百廿間余錦帶橋と名く人家橋より西南にあり
皆瓦屋にして富商有町二十餘町ありて二万余家あり
旅館主人の語りしに此國總て疱瘡を嫌ふ稀に疱瘡
を煩ふ者あれハ市中に居ることならず松家の小津村といふ所へ
引越すなりに其比春三月之頃ハ海上蜃氣起ることあり
先蜃氣起んとする時ハ春月天氣朗にして海上に霧を
生ず遠くかすみて一里又半里を隔城郭屋樓の姿

八山上小塔多く八竹林乃形を顕ハし直に霧して舊乃島也又色くれ形とする雲霧中に淡墨を以て画がきし塀のことく白山上松らと明かれたる海土路村よりハ正面にみえて形し小作村よりハ横に見えし形斜めに此ハよく八島潜と云なり又四時より八時迄となる八代島（長州の内三万石乃和）又兎形なる上ハ閣嶋也方船とうけるかけして蜃気ハ此島の方より起こし又此浦よ犬神とてあり物犬神の人来りて喰物或器物やりれしの好物とおもへバ起りバ生求して不精しる者忽犬神取付狂人となる能ハじも犬神の者ハ且て人ニ

あつまる事を不知撈へんとするに織物の具に
機と云ものゝ如く中に穴ありて水をとほし渋犬神より
出るなり右の鉄を以て息犬神の如くなりて問れぬ
時答るとなりこゝに於て博学多識の人云く理を
明らむるものゝ理を以てせまる落去となり
岩國より七里鍾ヶ原と云所深山にして水晶石英や
まじり又生ちらす所に蛇食と云所ある流河にして水底皆
板のごとし岩にして所々蛇の喰あと有るゆへに名付
廿三日朝五時より錦帯橋を渡り川に沿ふて行事十余

町船にて川を渡（ワタル）十五六町入て阿品（アシナ）村に夫をかへ此より
八九町山の中に入犬戻（イヌモトリ）といへる山中骨（ホ子）をりて渓水（ケイスイ）をわたり
岩石（ガンセキ）に沿て飛（トビ）言（コト）に峨（ガ）々たり此ころ秋なりけれは
岩上（ガンシヤウ）草木紅葉して恰山水画の如し行事一里余
彌山嶽（ミセンダケ）とて山高く甚（ハナハダ）の嶮岨（ケンソ）にて石を踏（フミ）てのぼる
事二十一町余絶頂（ゼツテウ）に堂あり山神を祭るよし
此山をくだりて日暮旅館（リヨカン）に入る犬戻右の方山を越
行ば洞（ホラ）あり鐘（カ子）乳石（チイシ）あり

犬戻（イヌモドリ）
岩上松を生ず

犬戻

聳たる岩の内洞あり
此路皆岩石を越て
十間廿間乃大石多し

犬戻
此所ハ岩脊ニ登り
谷乃流れを視る

岩の皺

九月廿七日岩國を發して山中に入てり海邊に出大賀岬と云なり向に萩島八代島相し向ひ其外小島數々見ゆる此ところ蜃樓の見ゆる所なり漁父に尋ねけるは此日天氣よく晴て長閑にして春三月比のごとし島々は空に浮ひたる樣に見ゆるうちに程なく八代島霞を帯てかくれたるが霞の中に小山あり松なとの形ちあらはれたる漁父の曰是則蜃氣樓なりとや又すてやみぬ秋起る事稀也此蜃氣樓は島々にかゝれて其うちに樓臺竹林の形ちあらはれ又其の島の方へうつりてゆくゆくハあとの形ちなしそれより申の刻よりて大畠に帰る

此路海邊にして島々多く見ゆ前島より一里大島より
十里小鳥島小黒島小新五郎 是を小嶋と云 及島の数二百余なるよし
渚邊岩石多し風景佳七里ばかり濱也大畠の瀬戸山上より
見る両山高く其山間僅三四町ほどより見ゆる海中岩石あり
出潮の流急し夫より山をこえて大畠村にいる此邊旅客
の通り絶てあれ果し所なり柳井津村に宿す市
街瓦屋岩國の領地なり
廿八日柳井津を出て行こと一里半多武瀬村をこえ鵜
市といふ所人家多し紺屋多し布をさらし居たり國木

山を越て峠防州長州の境なり室積と云所山上より見る佳景也山をくだりて人家千餘軒ありしとなる乃邊鄙にして食店なしこゝをとをりて松原二里漸嶋田といへる一村よりある旅籠なし農夫の舎に宿る

九月廿九日朝まだき出足し河をこえて濱邊松原をゆくの半里余皆砂地なり又海岸に大石よこたはり或斜にありあるを乘越て通路とし漸戸田と云所を過る塩濱あり人家とゝのふる毛利侯徳山の領地にかゝりて戸石と云に出此所よりはまべの徳山に至る道程四里福川より此所へ二里半

大畠の瀬戸
潮の満るに
殊に急流にして
船をはしる事矢
のごとし
豊後山
室積（ムロツミ）

冨海にて宿す冨海村を發して行事二里半宮市也宮市人家
多く有り佐波川を渡り右の方山間より入萩路也毛利侯三十万石の城下なり
岩淵峠佐野峠あり佐野焼といふ火鉢壺の類をやく行事七里山中といへる
所に一宿す山中を發して行事二里半二股瀬川
といへり吉見村新道峠あり船木といへる人家つゞく冨商あり
此邊總て家ごとに石炭を焚く途中あまり臭し又煙
多し錦帯のやうに出る山腰を堀出し石炭なり
楠の事七里長府よりつゞきてあれども河川蓮臺寺坂
吉田川あり岩國より此邊まで櫨の樹を植え紅葉如花

巻之二終